

母親の養育スキル尺度の妥当性の検討

—子どもの成長に対する認知・感情、思春期の子育て態度との関連—

渡邊 賢二¹⁾ 平石 賢二

問題と目的

これまでの親の養育態度を測定する尺度として、Baumrind (1967, 1971, 1991) は、観察的研究と先行研究を踏まえ、親の要求性と応答性の2次元を見出した。要求性とは、親は子どもが成長することを期待しつつ、管理やしつけに努めたり、子どもと議論したりすることを望む態度のことであり、応答性とは、子どもの独立性や自己主張を親が育成しようとする態度のことである。その後、Maccoby & Martin (1983) は、要求性と応答性の組み合わせにより、要求性と応答性がともに高い「権威のある親の態度」、要求性が高く、応答性が低い「権威主義的な親の態度」、要求性が低く、応答性が高い「甘やかしの親の態度」、要求性と応答性がともに低い「放任的な親の態度」の4つのタイプに養育態度を分類している。「権威のある親の態度」は親が子どもに対して自らの価値観に基づいた行動の指針を示し、要求もするが、同時に子ども自身の自己主張や要求に対しても応答的で、それを支持、尊重している態度、「権威主義的な親の態度」は子どもに従順さを強いる権威指向的な態度、「甘やかしの親の態度」は親は子育てに自信がなく子どもに毅然とした態度で接することができない態度、「放任的な親の態度」は子どもに対して無関心、拒否的な態度である(平石, 2006)。「権威のある親の態度」で子どもと関わることは、子どもの有能感、自律性、向社会性などと関連があることが報告されている(Basic Behavioral Science Task Force, 1996; Steinberg, 2001; Slicker & Thornberry, 2002)。

日本では、辻岡・山本(1976, 1977)は因子的実質性の原理という独自の方法により、親の性×子どもの性の4通りの組み合わせに共通する因子とその項目の抽出を行い、「情緒的支持」「同一化」「統制」「自律性」の4因子による親子関係診断尺度(EICA)を作成している。この尺度はScheaffer(1965)が作成したCRPBIを基に

作成されており、子どもによる両親に対する4因子の関係認知を測定している。標準化の過程が明らかにされた質問紙であり、中学生、高校生を対象とした子ども用だけであったが、小高(1994)がEICAを親用にして研究を行っている。東・柏木・繁多・唐澤(2002)は小学生4年生～高校生の子どもの親との関係を情緒的側面から把握できる親子関係診断検査(FDT: 下位尺度—親用「無関心」「養育不安」「夫婦間不一致」「厳しいしつけ」「達成要求」「不介入」「基本的受容」、子ども用「被拒絶感」「積極的回避」「心理的侵入」「厳しいしつけ」「両親間不一致」「達成要求」「被受容感」「情緒的接近」)を作成している。

これまでの青年期における親子関係研究では、子どもが親をどのように認知し、親との間でどのような感情に基づく行動をとるかについて測定される研究が多く行われており、その大半は子ども側からの親の養育態度研究であった。しかしHolmbeck, Paikoff & Brooks-Gunn (1995), Steinberg & Silk (2002) は子どもの青年期への移行が親のメンタルヘルスや養育態度に与える影響を研究する必要があることを指摘している。さらにColeman (1997) は青年期における子育ての困難さの背景として、親役割の不確かさ、子どもに対する監督やモニタリングの適切さの変化などをあげ、親支援の必要性を述べている。これらより親の養育態度を親側の視点で行うことは意義があると思われる。

また先述した養育態度研究は、子どもの健康な心理社会的発達を促す親の養育態度に焦点を当てた研究である。青年期の子育てにおいて重要となる子どもとの良好な関係を構築・維持するために、子どもの成長・発達に応じた調整的な養育態度といった側面は十分に扱われてこなかったと考えられる。また先述した養育態度尺度は、幼児期・児童期から青年期まで一貫して重要とされる次元や特性について研究してきたものであり、青年期に特有の養育態度を測定しているものではない。中学生の親子関係研究の中で、中学生は親とのコミュニケーション量の不足(大山, 2001)、両親と一緒に過ごす時

1) 鈴鹿医療科学大学

間の減少 (Larson & Richards, 1994; Larson, Richards, Moneta, Holmbeck & Duckett, 1996)、両親との葛藤の増加 (Paikoff & Brook-Gunn, 1991; Papini & Sebbly, 1988) などが指摘されており、これらのことから考えると、中学生の子どもとの良好な関係を構築・維持するための相互調整的な養育態度といった視点で研究を行うことは重要であると考えられる。

渡邊・平石 (2007) は日常生活において、親は子どもの発達や成長を考えるとともに、親は子どもとの良好な関係を構築したり、維持するという相互調整的な態度で子どもと関わっているという考えから研究を行った。中学生の母親が子どもとの良好な関係を構築・維持するための行動を「養育スキル」と呼び、「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」の下位尺度から構成される母親の養育スキル尺度を開発した。養育スキルは中学2,3年生よりも中学1年生の母親の得点が高いこと、母親の養育スキルと母親の自尊感情、子どもの自尊感情との関連などを明らかにしている。また渡邊・平石 (2009) は、養育スキルは媒介する変数である子どもの母親に対する相互信頼感を通して、間接的に子どもの心理的適応に影響を及ぼすであろうという媒介変数モデルの仮説に基づき研究を行った。その結果、「子どもの母子相互信頼感」と「子どもの不適応」との間、「理解・関心スキル」と「子どもの母子相互信頼感」との間に有意な関連が認められたことを報告している。

しかし、これまで中学生の母親の養育スキル尺度と他の養育態度尺度との関連や養育スキル尺度の妥当性は明らかにされてこなかった。そこで本研究は、母親の養育スキル、下位尺度「道徳性スキル」、「自尊心スキル」、「理解・関心スキル」の構成概念妥当性を検討し、他の養育態度尺度とどのような部分に関連し、どのような部分に相違がみられるのか明らかにすることを目的とする。

母親の養育スキルの妥当性と他の養育態度尺度との関連を明らかにするために、平石 (2007) が開発した「子どもの成長に対する認知・感情尺度」と「思春期の子育て態度尺度」を用いることにした。平石 (2007) は半構造化面接により、子どもの思春期移行に対して母親がどのような認知と感情を抱いているかという「子どもの成長に対する認知・感情尺度」を作成し、因子分析の結果「肯定的認知・感情」と「否定的認知・感情」の2因子を見出した。また同様の方法により、思春期の子どもに対して、母親はどのような子育て態度をとっているのかという「思春期の子育て態度尺度」を作成した。因子分析の結果「不安定な態度」、「威厳ある態度」、「適切な心理的境界」、「主体性の尊重」の4因子を見出した。「思春期の子育て態度尺度」を作成する過程において、母親が日

常生活での思春期の子育ての際に、親は子どもと葛藤や対立がある場合に、どのような工夫や対処、解決方法を行っているのか、どのような方法で子どもとの関係を修復しようとしているのか調査している。日常生活で子どもとの良好な関係を構築・維持するための母親の行動に視点をおいている養育スキル尺度と類似した部分があると思われる。

母親の養育スキルと「子どもの認知・感情尺度」の「肯定的認知・感情」との関連については、子どもとの良好な関係を考慮に入れた養育を行っているならば、子どもに対する肯定的な認知や感情を抱いている可能性が考えられるために、正の相関関係が予想される。反対に、「子どもの認知・感情尺度」の「肯定的認知・感情」と養育スキルとの関連については、子どもとの良好な関係を考慮に入れた養育を行っているならば、子どもに対する否定的な認知や感情を抱いている可能性は低いと考えられるために、負の相関関係が予想される。

子どもとの良好な関係を考えた養育と「思春期の子育て態度尺度」の「不安定な態度」とは、全く反対な養育態度と考えられるため、養育スキルのすべての下位尺度と「不安定な態度」との間には負の相関関係が予想される。「威厳ある態度」は子どもに対して日常的にしつけや道徳的な教示を行う項目であるために、「道徳性スキル」と「威厳ある態度」との間に強い正の相関関係が予想される。「適切な心理的境界」は子どもの行動に対して配慮をしたり、距離をおいて接している項目であるために、「自尊心スキル」と「適切な心理的境界」との間には正の相関関係が予想される。「主体性の尊重」は子どもの行動や気持ちに配慮し、成長を促すような行動をとる項目であるために、「自尊心スキル」と「主体性の尊重」との間には強い正の相関関係が予想される。これらより、母親の養育スキルの下位尺度「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」の構成概念妥当性を検討することを目的とする。

また、第2の目的として、母親の養育スキル下位尺度と思春期の子育て態度下位尺度を因子分析し、相互的関連性を検討することによって、母親の養育スキルの下位尺度「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」の性質を明らかにする。

方法

調査対象者 三重県内の中学校10校（公立中学校9校、私立中学校1校）を対象にし、在籍する中学生とその保護者3543組に対して調査を実施し、2505組の調査票を回収した。回収率は70.7%であった。保護者に対しては、「普段、子どもと一番関わっている保護者」1名が回答

Table 1 養育スキルと子どもの成長に対する認知・感情、思春期の子育て態度の相関関係

	認知・感情		子育て態度			
	肯定的 認知感情	否定的 認知感情	不安定な 態度	威厳のある 態度	適切な 心理的境界	主体性の 尊重
道徳性スキル	.27***	-.19***	-.28***	.74***	.15***	.48***
自尊心スキル	.40***	-.31***	-.45***	.52***	.41***	.74***
理解・関心スキル	.32***	-.36***	-.41***	.51***	.11***	.55***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

するように依頼した。その結果、2505組の回答の内訳は、母親2242名、父親195名、祖父1名、祖母18名、おば1名、不明48名であった。本研究においては、回答者が最も多かった母親にのみ焦点をあて、有効回答である2242組の母子のペアデータ（男子1045名、女子1196名、不明1名；中学1年生859名、2年生740名、3年生637名、不明6名、母親の年齢：平均41.64、 $SD=3.85$ 、range 30-59歳）を分析の対象とした。

調査時期 2006年6月下旬～7月中旬に実施した。

手続き 担任教諭に教示文を渡し以下の点を依頼した。
①生徒に「生徒用」と「保護者用」の質問紙がはいった封筒を配布し、保護者に渡すこと。②回答は生徒、保護者とも家庭で別々に実施し、終了したら密封し、担任教諭に提出すること。

被験者への倫理的配慮として、調査回答は統計的に処理され、一人一人の回答が取り上げられないことがないこと、調査はテストではなく正しい答えや間違ったことがないこと、また母子家庭や父子家庭なども考えられるために、「本調査へのご回答は、普段、お子様と一番よく関わられている保護者の方にお問い合わせ致します」ことを記述した。

調査内容

- ①**基本的属性** 年齢・就労形態・子どもの学年・性別を尋ねた。
- ②**養育スキル尺度** 渡邊・平石（2007）が作成した養育スキル尺度。下位尺度は「道徳性スキル」9項目、「自尊心スキル」8項目、「理解・関心スキル」6項目、合計23項目を「1まったくあてはまらない」～「6非常にあてはまる」の6段階評定で回答を求めた。「道徳性スキル」は「子どもに日常生活における規範、慣習、生活態度を教示したり、見守る」、「自尊心スキル」は「子どもの気持ちを配慮したり、子どもに肯定的なメッセージや自立・成長を促進する態度を示す」、「理解・関心スキル」は「子どもの態度に関心を示し、観察やコミュニケーションを用いて子どもに対する理解を深める」と定義されている。
- ③**子どもの成長に対する認知・感情尺度** 平石（2007）

が作成した子どもに対する認知・感情尺度、下位尺度として「肯定的認知・感情」と「否定的認知・感情」を表す質問項目各10項目、合計20項目を「1まったくあてはまらない」～「6非常にあてはまる」の6段階評定で回答を求めた。

④**思春期の子育て態度尺度** 平石（2007）が作成した思春期の子育て態度、下位尺度として、「不安定な態度」6項目、「威厳のある態度」6項目、「適切な心理的境界」7項目、「主体性の尊重」6項目、合計25項目を「1まったくあてはまらない」～「6非常にあてはまる」の6段階評定で回答を求めた。

結 果

母親の養育スキル尺度と子どもの成長に対する認知・感情尺度、思春期の子育て態度との関連

母親の養育スキル尺度と子どもの成長に対する認知・感情尺度、思春期の子育て態度との関連を検討するために、ピアソンの積率相関係数を求めた（Table 1）。その結果、「道徳性スキル」、「自尊心スキル」、「理解・関心スキル」と「肯定的認知・感情」との間はすべて有意な正の相関関係、「否定的認知・感情」との間はすべて有意な負の相関関係が見られた。また「道徳性スキル」、「自尊心スキル」、「理解・関心スキル」と「威厳のある態度」、「適切な心理的境界」、「主体性の尊重」との間が有意な正の相関関係、「不安定な態度」との間は有意な負の相関関係が見られた。

母親の養育スキルと思春期の子育て態度下位尺度の因子分析

母親の養育スキルの下位尺度と思春期の子育て態度の下位尺度との相互的関連性を検討するために、母親の養育スキル尺度の下位尺度である「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」と思春期の子育て態度尺度の下位尺度である「不安定な態度」「威厳のある態度」「適切な心理的境界」「主体性の尊重」に対して主因子法・Varimax回転による因子分析を行った。固有値の減衰状

Table 2 養育スキル下位尺度と子育て態度下位尺度の因子分析 (Varimax 回転)

	I	II	III	共通性
道徳性スキル	.85	.30	.10	.82
威厳のある態度	.79	.18	.19	.69
理解関心スキル	.46	.72	.04	.73
自尊心スキル	.46	.53	.51	.75
不安定な態度	-.10	-.50	-.28	.34
適切な心理的境界	.05	.09	.67	.47
主体性の尊重	.35	.49	.63	.76
因子寄与	1.91	1.41	1.24	4.56
寄与率	27.16	20.19	17.68	65.03

況、解釈の可能性から3因子構造が妥当であると考えられ、最終的な因子行列をTable 2に示す。

第1因子は「道徳性スキル」、「威厳のある態度」、第2因子は「理解・関心スキル」、「自尊心スキル」、「不安定な態度」、第3因子は「適切な心理的境界」、「主体性の尊重」の因子負荷量が高かった。

考 察

母親の養育スキル尺度と子どもの成長に対する認知・感情尺度、思春期の子育て態度との関連について

はじめに、母親の養育スキルの下位尺度「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」と子どもの成長に対する認知・感情の下位尺度「肯定的認知・感情」「否定的認知・感情」との関連について考察する。「肯定的認知・感情」と「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」との間には正の関連が示された。「否定的認知・感情」と「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」との間には負の関連が示された。平石(2007)は面接調査より、「肯定的な認知・感情」は「自分の意見を述べられるようになってきており成長したと感じる」、「自分の目標に向かって前向きに取り組むようになってきている」、「親子で対等に近い感じで会話ができるようになり嬉しい」などを抽出している。このように母親が子どもに対して肯定的な認知や感情をもっていると、子どもと良好な関係を構築したり、維持するという行動をとる傾向があるといえよう。また、「否定的な認知・感情」は「反抗的な態度に出るようになってきており、いらだちを感じる」、「親の目から見て心配な行動が増えてきているが、それを抑えることができず戸惑う」、「子どものことで把握できていないことが多く、不安を感じる」などである。このように母親が子どもに対して否定的な認知や感情をもっていると、子どもと良好

な関係を構築したり、維持する行動が少ない傾向にあるといえよう。これらの研究結果は、仮説を支持しているといえよう。

次に、母親の養育スキルの下位尺度「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」と思春期の子育て態度尺度の下位尺度「不安定な態度」「威厳ある態度」「適切な心理的境界」「主体性の尊重」との関連について考察する。

「不安定な態度」と「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」のすべての下位尺度との間で、弱から中程度の負の相関関係が示された。「不安定な養育態度」は「子どもに対してどのように接すれば良いのかわからない」「子どもの考えが分からず戸惑う」など、子どもとの良好な関係を構築・維持する行動、養育スキルとは反対の養育態度と考えられるために、負の相関関係が示されたと思われる。

「威厳のある態度」と「道徳性スキル」との間には強い正の相関関係、「自尊心スキル」「理解・関心スキル」との間には中程度の正の相関関係が見られた。「威厳のある態度」は「これだけは許さないということを必ず伝えている」「やってはいけないことには厳しく対応している」など、母親は子どもに対してしつけや道徳的な教示を行っているという項目である。「子どもに日常生活における規範、慣習、生活態度を教示したり、見守る」と定義されている「道徳性スキル」(渡邊・平石, 2007)と類似している項目があり、強い関連が示されたといえよう。

「適切な心理的境界」と「道徳性スキル」「理解・関心スキル」との間には弱い正の相関関係、「自尊心スキル」との間には中程度の正の相関関係が見られた。「適切な心理的境界」は「子どもの言いたがらないことは興味本位で聞き出さない」「子どもが保護者に見て欲しくない

ものは隠れてみない」など、母親は日常の子どもの行動に対して配慮をしたり距離をおいて接しているという項目である。「子どもの気持ちに配慮したり、子どもに肯定的なメッセージや自立・成長を促進する態度を示す」と定義されている「自尊心スキル」(渡邊・平石, 2007)とは、肯定的なメッセージや成長の促進などの点で相違はあるが、類似した項目があるため、中程度の正の相関関係が見られたと考えられる。

「主体性の尊重」と「道徳性スキル」、「理解・関心スキル」との間には中程度の正の相関関係、「自尊心スキル」との間には強い正の相関関係が見られた。「主体性の尊重」は「まずは子どもの話に耳を傾けている」「子どもの考えを引き出すように心がけている」など、母親は子どもの行動や気持ちに配慮し、成長を促すような行動をとるという項目である。「自尊心スキル」は子どもの気持ちに配慮したり、子どもに肯定的なメッセージや成長を促進するような行動を示す項目であるために、強い正の相関関係が示されたといえよう。

これらの研究結果は、仮説をほぼ支持しており、母親の養育スキルの構成概念妥当性が示されたといえよう。また母親の養育スキルは子育ての「肯定的な認知・感情」、「否定的な認知・感情」と関連が示され、思春期の子育て態度の「威厳のある態度」、「主体性の尊重」と強い関連が示された。すなわち、子どもに対して肯定的な認知や感情をもっている母親は、養育スキルを用いているといえよう。また母親が日常子どもと良好な関係を構築したり、維持していくための関わりは、子どもに対して威厳のある態度で接しながらも、子どもの主体性の尊重を考えて接していると推察される。

母親の養育スキル下位尺度と思春期の子育て態度下位尺度の因子分析について

母親の養育スキルの下位尺度と思春期の子育て態度の下位尺度との相互的関連性を検討するために、母親の養育スキルの下位尺度「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」と思春期の子育て態度の下位尺度「不安定な態度」「威厳のある態度」「適切な心理的境界」「主体性の尊重」を主因子法・Varimax回転による因子分析を行った結果、3因子が得られた。

第1因子は「道徳性スキル」と「威厳のある態度」の因子負荷量が高かった。「道徳性スキル」は「子どもに社会のルールを守るように言っている」「子どもに責任をもって行動するように言っている」などの項目、「威厳のある態度」は先述した項目内容である。両尺度とも母親が子どもに対して、社会的なルールやマナーなどを話したり、教えたりするという項目内容で類似している

ために、同じ因子になったと思われる。EICAの4因子尺度の「統制」の項目内容「いつも私の性格を改めようとする」「私がいいつけ通りにするまで私を自由にさせてくれない」などと類似しているが、「道徳性スキル」の項目内容と比較すると、非常に厳しい統制と思われる。またBaumrind (1967, 1980, 1991), Maccoby & Martin (1983) の養育態度「要求性」「応答性」の次元から解釈すると、渡邊・平石 (2007) でも述べているように、親が子どもの成熟することを期待し、管理やしつけに努めたり、議論したりする「要求性」の次元と類似していると考えられるが、「道徳性スキル」は子どもの行動や健康などを気にかけているという子どもを見守るという部分があり、相違があると思われる。これは養育スキルが良好な関係を構築・維持するという視点に重点をおいているからと思われる。

第2因子は「理解・関心スキル」、「自尊心スキル」、「不安定な態度」の因子負荷量が高かった。「理解・関心スキル」は「子どもに学校であったことなど一日の出来事を聞いている」「子どもに話しかけ、意見や感想を聞いている」などの項目、「自尊心スキル」は「子どもにあやまるべきところは、素直にあやまっている」「他の子どもと比較して話をしないように気をつけている」などの項目、「不安定な態度」は先述した項目内容である。「不安定な態度」の項目内容を反対に考えると子どもを理解しようとする項目内容になるために、同じ因子になったと考えられる。しかし「自尊心スキル」に関しては、因子負荷量が第2因子だけでなく、第3因子にも同程度の因子負荷量.51を示している。また少し因子負荷量は低い第1因子にも.41の因子負荷量を示しているため、「自尊心スキル」はすべての因子内容を含んでいると考えられる。「理解・関心スキル」は第1因子に対して、.46の因子負荷量を示しており、第2因子の負荷量と比較すると差異は見られるが、第1因子の項目内容も若干含まれているといえるのではないかと。EICAの4因子尺度の「情緒的支持」の項目内容「私の言うことに耳を傾けてくれる」「心配事をじっくり聞いてくれるので私の気持ちが楽になる」などと類似しているが、「自尊心スキル」の子どもに肯定的なメッセージや成長を促進するという項目内容は含まれていないと思われる。またBaumrind (1967, 1980, 1991), Maccoby & Martin (1983) の養育態度「要求性」「応答性」の次元から解釈すると、親が子どもの独自性や自己主張を育成し、支持的で子どもの欲求を受け入れる「応答性」の次元と類似していると考えられる。しかし、渡邊・平石 (2007) が指摘しているように、「自尊心スキル」は子どもに肯定的なメッセージや成長を促進する態度を示すような点、「理解・関心

スキル」は「応答性」より子どもに広い範囲で関心を示したり、子どもに対して理解を深めるという点で相違があると考えられる。

第3因子は「適切な心理的境界」, 「主体性の尊重」の因子負荷量が高かった。先述したように「適切な心理的境界」は子どもの行動への配慮や距離をとって接するという項目, 「主体性の尊重」は子どもの行動や気持ちへの配慮や成長を促進するように接するという項目であるために, 同じ因子になったと考えられる。また「自尊心スキル」が第2因子と第3因子で同程度の因子負荷量であったのは, 子どもに肯定的なメッセージや成長を促進するという項目内容が含まれているからであると思われる。

まとめと今後の課題

本研究は, 母親の養育スキル尺度と子どもの成長に対する認知・感情尺度, 思春期の子育て態度尺度との間に, どのような関連があるのか, また母親の養育スキル尺度の妥当性を検討した。その結果, 養育スキルの下位尺度と子どもに対して「肯定的な認知・感情」との間には正の関連, 「否定的な認知・感情」との間には負の関連が示された。養育スキルの下位尺度と「不安定な態度」との間には中程度の負の相関関係, 「威厳のある態度」, 「主体性の尊重」との間には中程度から強い正の相関関係が示された。また因子分析の結果, 第1因子「道徳性スキル」と「威厳のある態度」, 第2因子「理解・関心スキル」と「自尊心スキル」と「不安定な態度」, 第3因子「適切な心理的境界」と「主体性の尊重」が同じ因子であった。しかし, 「自尊心スキル」については第2因子と同程度の負荷量を第3因子, 第1因子にも示していた。

これらより, 母親の養育スキルは子どもの成長に対する「肯定的な認知・感情」, 「否定的な認知・感情」と関連があること, 「威厳のある態度」と「主体性の尊重」と関連が強いこと, 母親の養育スキルの妥当性が示されたと考えられる。また, 子どもとの良好な関係を構築・維持する視点を重視している養育スキル下位尺度「道徳性スキル」「自尊心スキル」「理解・関心スキル」は, それぞれ別の側面を測定しており, これまでの養育態度尺度である Baumrind の養育態度や EICA と類似している箇所はあるが, オリジナルな尺度と思われる。

本研究は, 母親の養育スキルと平石 (2007) が作成した子どもの成長に対する認知・感情尺度, 思春期の子育て態度尺度との関連と妥当性を検討した。今後は母親の養育スキルの詳細な部分を検討するために, これまでの親の養育態度の研究でよく用いられている Baumrind の養育態度尺度や EICA を用いて検討する必要があると思

われる。

引用文献

- 東洋・柏木恵子・繁多進・唐澤真弓 (2002). 親子関係診断検査手引 日本文化科学社
- Basic Behavioral Task Force of the National Advisory Mental Health Council (1996). Basic behavioral science research for mental health: Family processes and social networks. *American Psychologist*, 51, 622-630.
- Baumrind, D. (1967). Child care practices anteceding 3 patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Baumrind, D. (1980). New directions in socialization research. *American Psychologist*, 35, 639-652.
- Baumrind, D. (1991). Parenting styles and adolescent development. In R.M. Lerner, A.C. Petersen, & J. Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of Adolescence, Vol. II*, Garland Publishing.
- Coleman, J. (1997). The parenting of adolescents in Britain today. *Children & Society*, 11, 44-52.
- 平石賢二 (2006). 親の養育態度と青年の育ち 白井利明 (編) 「よくわかる青年心理学」 ミネルヴァ書房 pp.80-81.
- 平石賢二 (2007). 思春期の子どもをもつ親の心理的ストレスと子どもの人格発達に与える影響 平成15年～平成18年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書.
- Holmbeck, G.N., Paikoff, R.L. & Brooks-Gunn, J. (1995). Parenting adolescents. In MH Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum. 91-118.
- 小高恵 (1994). 親子関係と人格要因との関連性についての一考察. 性格心理学研究, 2, 47-55.
- Larson, R.W., & Richards, M.H. (1994). *Divergent realities: The emotional lives of mothers, fathers, and adolescents*. New York: Basic Books.
- Larson, R.W., Richards, M.H., Moneta, G., Holmbeck, G., & Duckett, E. (1996). Changes in adolescent's daily interactions with their families from ages 10 to 18: Disengagement and transformation. *Developmental Psychology*, 32, 744-754.
- Maccoby, E., & Martin, J. (1983). Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In E.M. Hetherington (Vol. Ed.) & P.H. Mussen (Series Ed.), *Handbook of child psychology: Vol.4. Social-*

- ization, personality, and social development (pp.1-101). New York: Wiley.
- 大山七穂 (2001). 親子関係と親の影響力 第2回青少年の生活と意識に関する基本調査報告書, 内閣府政策統括官
- Paikoff, R. & Brooks-Gunn, J. (1991). Do parent-child relationships change during puberty? *Psychological Bulletin*, 110, 47-66.
- Papini, D.R., & Sebbby, R.A. (1988). Variations in conflictual issues by adolescent pubertal status, gender, and family member. *Journal of Early Adolescence*, 8, 1-15.
- Schaefer, E.S. (1965). Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-424.
- Slicker, E.K., & Thornberry, I. (2002). Older adolescent well-being and authoritative parenting. *Adolescent and Family Health*, 3, 9-19.
- Steinberg, L. (2001). We Know Some Things: Parent-Adolescent Relationships in Retrospect and Prospect, *Journal of Research on Adolescence*, 11, 1-19.
- Steinberg, L. & Silk, J.J. (2002). Parenting adolescents. In MH Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting (2nd ed)*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum. 103-133.
- 辻岡美延・山本吉廣 (1976). 親子関係診断尺度 EICA の作成. 関西大学社会学部紀要, 7, 1-14.
- 辻岡美延・山本吉廣 (1977). 親子関係の相互認知—小嶋氏の原資料の一分析—. 教育心理学研究, 25, 18-29.
- 渡邊賢二・平石賢二 (2007). 中学生の母親の養育スキル尺度の作成—学年別による自尊感情との関連—. 家族心理学研究, 21, 106-117.
- 渡邊賢二・平石賢二・信太寿理 (2009). 母親の養育スキルと子どもの母子相互信頼感, 心理的適応との関連. 家族心理学研究, 23, 12-22.

(2009年11月15日受稿)

ABSTRACT

Examination on Validity of Mothers' Parenting Skills Scale:
The Relationship among Scale for Mother's Cognitive and Affective Attitudes
on Adolescent and Mother's Parenting Attitude toward Adolescent Child

Kenji WATANABE and Kenji HIRAISHI

The purpose of this study was to examine the validity of parenting skills scale, and the relationship among the parenting skills scale and scale for mother's cognitive and affective attitudes on adolescent and mother's parenting attitude toward adolescent child. 3 subscales of the parenting skills were positively related to "positive cognition and affection" and negatively related to "negative cognition and affection." They were negatively related to "sense of uncertainly" and positively related to "firm but fair parenting" and "respect for autonomy." These result showed the construct validity of parenting skills scale.

Factor analysis on 3 subscales of the parenting skills scale and 4 subscales of scale for mother's parenting attitude toward adolescent child found 3 factors. First factor was "morality skills" and "firm but fair parenting." Second factor was "understanding and interest skills," "self-esteem skills" and "sense of uncertainly." Third factor was "respect for privacy and personal boundaries" and "respect for autonomy." But "self-esteem skills" showed similar factor rating toward first factor and third factor.

Key words: mothers' parenting skills, validity, relationship